

団塊世代・元気高齢者地域活性化推進協議会（第3回）議論要旨

<議題>

- 1 団塊世代・元気高齢者地域活性化推進協議会（第2回）の要旨
- 2 地域レベルでの支援方法について
- 3 地域で活躍する人材の育成・養成について

<主な意見>

- 都レベルで何をするのが効果的か、市区町村、社協、町会・自治会、民生委員、老人クラブ等との連携を視野に入れながらまとめていく。
- 地域とは、どの範囲を指すのか？
 - 中学校区
 - 区市町村
 - 町会・自治会単位
 - 都全域⇒ 地域の定義は限定せず、多層的に見ることが大事
- 東京都の弱点は小地域レベルでの福祉活動を組織化して来なかったこと。これまでやってこなかったことをすぐにとは難しい。ただし非常に深刻。独居高齢者の孤独死が非常に増えている。
男性は非常に貴重な人材になって欲しいという期待。ただし簡単ではない。
- モニターアンケートでもあるように、これから高齢期を迎える人たちの活躍に対して期待値は高いはず。一方で期待できないというのは、何をやっていいかわからない、これまで地域活動がないがしろにしてきたというギャップがあるのだろう。期待したいが、期待できるかな？ やりたいけど、やっていけるかな？
定年を迎えた直後の人はすごく元気。体も動くし、意識も高い。その世代をいかに活動に引き込む、人材として養成・育成するかというところがポイント。
- この事業は、当面は市区町村が実施主体。市区町村で団塊の世代の方たちが地域活動をしていくときのギャップをどう埋めていくかというところを東京都として、先進的な事業をレビューしながら、各市区町村に対して啓発、支援していくかということになる。

- 事業を実施している区市町村にヒアリングしてみると、地域活動の体験とか講座等やるが、なかなかひとが集まってこない。新宿区では新規の事業に100人の募集をかけたが、最初は申し込みが全然なく、新聞で紹介されやっと集まったとのこと。世田谷区でも、最初をどう引き込むかが課題とのこと。まず引き込み、引き込んだ後、人材として養成し定着してもらうことが難しい。港区では、チャレンジコミュニティ大学というのを始め、講座という暇つぶし程度に参加している場合もあり、意識が高くない場合があるが、この大学では民生・児童委員の方々と一緒に講義を受けることで、大変意識が高まっているとのこと。NPO活動や地域活動へのきっかけとなっている。目的意識を持った人材養成が必要ではないか。

区市町村の意見として、成果がどう見えるかわからないので手がつけられない、必要性は感じているのだが・・・

- 地域のボランティアセンターやNPOが「お父さんお帰りなさいパーティー」など地域の入口づくりは結構増えつつある。講座という切り口では人は集まらない。講座だけではなく、アクティブな人の関係の構築が必要。その仕掛けをどうするかが重要。

団塊世代やその周辺を取り込もうとするなら、社会教育、教育委員会のほうと手を組みながらプログラムを拡げていくような仕組みを考えておく。

- 老人クラブでは、東老連大学校を毎年実施、老人クラブのリーダーを養成することが目的。対象者は70歳くらい。しかし、受講者を集めることが大変。老人クラブは後継者がいなくて解散するケースがある。

- NPOでも創設した理事長が引退すると、崩れていくという傾向がある。問題は団塊世代が活動に入るときの入口部分大きい。スムーズに入れない要因がある。そこをしっかりと踏まえ、どういう仕掛けをするかというのが大事では。

広域では実活動が達成しない、組織化できないという問題があるのでは。範囲にこだわらず、団塊世代の人が本当は社会貢献したいと思っているにもかかわらずうまく入れない、その問題を真剣に解決したほうがいいのでは。

- 団塊世代は社会貢献をしたいと思っているのか？団塊世代は趣味の世界や気の合う友達と旅行へ行き、それら一通りやって、そのあとにチャンスがあって地域活動へ踏み出す。

団塊世代は仕事がなくなったときに、ネットワークをどう作っていくか、会社の縦線のところでやっていたのを、お隣同士でつながっていくという

まずそこから。自分達の楽しみでやっていたものが、NPOなどで実践して感謝してもらおうと目覚めてくる。その辺が、男の方たち、団塊世代・元気高齢者の実態。期待は大きいがすぐには無理。

- 団塊世代の人たちが頑張りだした例があって、親を介護した人で施設に入れるなどで介護の手が空くと、途端に何かをやりたいと言い出す。

また、老人クラブの会員はみんな元気。全員が支援者になればみんな元気にやってくれる強い存在。イベント時にお願いをすると朝早くから来てくれ、会場設営等いろいろとやってくれる。そういう人達が沢山いれば介護保険も何も要らない。支援するひとを都が支援するということで要考察。

- 団塊世代はお金があると思われているが、お金のない団塊世代のひとも入る。求人をする、沢山の55歳以上が応募してくる。まだ就職できる、65歳までは現役という意識がある。

80歳代を全国で見ると、2割のひとは外出できない。老人クラブの友愛活動は元気な人が元気でない人を見ていくということが基本。団塊世代の男性は自分の楽しみだけ。引き込むためにはまず生きがいを。地域社会の担い手としての自覚から必要。

- 60歳以上でも社会貢献したいという結果が出ているが、それがなぜマッチングしないのかという問題がある。これを解決しなくてはいいんだよ、時間がかかる。経済的に「収入がもうそんなになくてもいいんだよ」という実感が出てくるには3~4年かかる。地域貢献とマッチングを考えると簡単には行かない。なぜかと言うと、企業OBは企業OB会のほうが居心地が良い。企業が行うセカンドライフ講座でキャリアチェンジを考えさせる場にならないといけない。

- シニアの活用という意味で、事業型NPOや、ソーシャルインクルージョンだとか、これまで仕事してきた人が社会貢献と言いつつもお金を稼ぐといった、NPOとはちょっと矛盾するが。例としてビッグイシューは、ホームレスの方に本を配ってお金を手当てしホームレスの社会復帰を支援するというような活動をやられている人がいる。こういう場合は、企業で働いてきた方のほうがよりイメージをもちやすい。

- 港区のチャレンジコミュニティ大学がうまくいった理由は、連携している明治学院大学が熱心でその学部の先生が一生懸命にやっている。港区は町会が主体でそこにNPOも交えて、動き出した。港区は支所単位で、高輪支所がわりあいとそういうことに熱心にやる。うまく結びついたということ

とがある。これが赤坂支所ではうまくいかないかもしれない。

- 世田谷区では男の台所という活動あり、現在の会員は100名ぐらい。各エリアごとに学校があり、4校ぐらい。男性の集まり率が非常に高い。リタイアする・した男性は料理に興味を持っている。料理で集客することができるのでは。しかし、人が集まり料理だけやっているわけではない。熟練したひとたちは、ミニディにいったお手伝いをしたり、社会貢献もしている。輪が広がっていく。

NPO でなんでも相談できるブースを設けており、そこを起点に魚のさばき方やパーティーといった仕掛けをして集まってくる。さらに発展して移送サービスに元タクシー運転手の方が手伝いに行ったり、見守りや手伝いの活動に広がっている。オーガナイズする人がいれば集まってくる。そういう仕掛けが非常に重要。

他にも世田谷区では「ひと・まち塾」でも人材養成を行っているが、一番の課題は欲しい人がなかなか集まらない。イベントをやるときにその層に情報が届かない。区の広報や区の施設に案内を置いて、来て欲しい人は働いているから全然見ない。マスコミが取り上げてくれたイベントはかなり人が集まる。何かやるときはマスコミを活用しないと成功しないという実感がある。

- 町会・自治会は高齢化してくるけれど、ちゃんと引き継がれていく。高齢者もいるが若い世代の理事もいる。女性がかりじゃなく、男性でも出てきている。

中野区では老人クラブの教養講座や介護予防といった行事は1年間で40回もやっていた。高齢者は元気。町会・自治会をやっているひと達も元気になってきている。みんな活発。あまり心配することないのでは。学童のパトロール、見回りとなると沢山のひとが参加してくれる。見回りの時間を決めてやっている。男性も出てくる。それがきっかけとなって、町会・自治会の理事会に参加するようになる。どこかできっかけをつくれば出てこられる。

- 自治会、老人会に加入していないと東京砂漠の中、ひとりで住んでいる。それをいかにして引き込むか、それには何人かの仕掛け人が必要。

東京では、町会・自治会の中に入って近所付き合いをよくするということが第一歩。町会・自治会が地域貢献の窓口になる。

- 団塊世代になってからということではなく、自治会にたまに出てきて、仕掛けをつくり、仕事をやめると、自分も楽しむと同時に世の中のお役に立ちたいということで、きっかけがあるといろんなことをやってくれる。

ただし、団塊世代が退職してから急に社会貢献を、地域で活動をするというのは難しい。すぐ地域福祉につながらなくても、とにかく自分たちの地域の中で、ご近所で生活しているんだぞという実感を持ってもらうような働きかけ、仕組みをつくっていく。そこが第一歩。それができるとNPOが手ぐすね引いて待っている。

- NPOは引っ張り込みたいと思っているが、企業OBの団塊世代には伝わっていない。団塊世代はNPOの中で自分のスキルが生かすことができるという認識がない。しかし、必ず生かせる。また、NPO側も引き込みたいと思っても、実際にはパワーがない。告知力の問題。

60歳代が一番集まるイベントはウォーキング。5,000人集まる。ウォーキングのイベントとNPOの告知宣伝、それと引き込み、価値を体験、体感してもらうようなマッチングがあれば確実に団塊世代の意識は変わってくる感じがする。

- 企業は上下の関係で動くが、その感覚でNPOに来るとNPOはフラットな仕組みで動くからぎくしゃくする。ここを1回トランスしなくてはいけない。そこに介在する人が必要。仕組みだけでなくきちんと対応できる人が必要。

- 自分としては楽しくてやっていることが、どんなに地域貢献につながっているかということを実感してもらうことが必要。地域はフラットなんだと実感してもらいつつ、好きでやっていることが思いがけず人に感謝される、地域に役立っていることをわからせる、そこに人材が必要。

- 前回の会議でも出た「コーディネーター」、「プログラムオフィサー」、仲介役が必要。

- ある地区の町会に団塊世代の人が入っただけで、お祭りのお酒に付き合えないので、他の活動を始めた。地域の何でも相談を受けて、コーディネートをする人をいかに作るか。NPO、町会、商店街、仲よくしないと先には進めない。案外、団塊の世代は動き出すと出来るような気がする。それが使命だよとはっきりさせること、伝えることが必要。

地域の中にNPOはいっぱいある。その人達が一緒に活動する場所があり、専門家がいっぱい集まれば、何でも相談になる。将来的には相談のニーズが増える。そういうときに地域のどこかにそういう窓口があるとよい。それを世間に言っていかなければならない。

- 企業ですっと仕事してきた方が、地域におりてくるには、プロセス（段

階)があり、それをスムーズに効果的にするには何か介入が必要。そのツールの開発が大きいが、東京のような大都会は難しい。ボランティアセンターにコーディネーターは結構いるが、若い。ボランティアセンターに団塊シニアの方たちに合うようなコーディネーター機能の余地はあるかなと感じる。

- 企業はいろいろな部署があり、調整力がないと仕事にならない。団塊世代の企業OBは利害関係をうまく調整し、オフィサーとかコーディネーターという力を発揮できる人材が多い。
- NPOは感情が渦巻くような世界で、企業のように感情を排する世界のようにはいかない。それがなじみにくい要素にもなっている。
- 定年退職者に対する取組みは、今年で9年目になり、割と早くから手を付けている。最初は奥さんへの救済措置。男の料理教室もやり、いろいろやり、いま難しい段階に来ている。働きたいという人が多い。できるなら70ぐらいまでは働きたいという人がいる。老人クラブに入るような人は元気。逆にそういうところとの接触を拒み孤立していったら、やっぱり手がかかるといふ状況になる。
- ボランティア活動に60歳以上の男性の数は非常に少ない。ボランティアは、高校生や中学生が多い。
- 町会・自治会への関心が40%と、低いのではなく40%も関心を持ってくれている。町会・自治会がこれからの社会の軸。高齢者の方々が参加してくれればすばらしい。
- 都は1,300万人という規模でエリアも広い。議論ではここをきちんと抑える必要がある。東京都レベルでどう戦略的に立てていくか、その辺を整理していく必要がある。
- 東京都が地域をどう見ているか、東京都が市町村しか見ていなかったとしたら、プログラムはうまくいかないだろう。市町村を見るのと同時に、かなり小さい単位、多層的に見えるということが大事。全体にやっても効果があるものから、狭いところで集中的に人が集まって効果が上がるものというものまで、こういう取組みが多層的に見えて、効果も含めて見えて整理できると方向性が出てこないかと期待する。